織子と「母」と「女性的」なもの

劉　　争

(1) 母織子と『羊の歌』の「母」

加藤周一の母親増田織子（1897～1949）の戸籍名は「ヲリ子」だが、加藤自身の綴りにしたがって本稿では「織子」を採る。織子は父増田熊六と母岩村ツタの間に、4人のうちの3番目の子として東京の原宿に生まれる。上には増田家の長男である兄と、長女である姉がいて、下には一人の妹がいる。双葉高等女学校に中途入学しカトリックに触れたことがあった。1916年に18歳の織子は当時30歳の加藤信一とお見合いを経て結婚した。加藤周一が二人の間に生まれたのは3年後の1919年である。織子が20歳頃に生死の境をさまよう大病を患いカトリックに入信したという[(1)]ので、加藤が生まれた前年に入信したのだろう。織子と夫信一は12歳離れた一回り違いの酉年生まれだが、2人の性格は大きく異なっていた。鷲巣力氏によれば「性格の違い、育ちの違い、考え方の違いは『羊の歌』のそこここに繰りかえし描かれる」[(2)]ほどである。加藤は子供の時から父親より母親と親しかったという。

> 加藤の親類関係は祖父熊六を中心にして結ばれていた。したがって、母方の親類関係は親密であり、父方の親族関係は疎遠である。[(3)]

加藤周一の母方の祖父増田熊六（1866～1939）は陸軍軍人であるが、その父の増田明道は佐賀藩士で「箱館戦争の論功行賞により明治政府から

東京・高輪あたりに広大な土地を与えられた」[4] ため、その資産相続により豪奢な暮らしだったという。そのような環境で生まれ育った織子と夫の家庭生活について鷲巣力氏の指摘がある。以下の通り引用する。

> 加藤は大正デモクラシーのさなかに、大正デモクラシーの風潮をいっぱいに浴びて育った。その後の日本社会と比べれば自由な風潮がまがりなりにもあった時代である。しかも、加藤が育った家庭は上流中産階級で、知識人が周辺に少なからずいた。両親は平等思想をもっていて、息子と娘を分け隔てなく育てた。子どもたちが中心となり、父親よりも母親のほうが家庭における主導的な立場にいた。「夫唱婦随」ではなく「婦唱夫随」が加藤の家の流儀であった。[5]

このように、織子は家庭生活の中で主導権を握り、かなりの発言権があったと思われる。子供たちは母親のほうと親しみ、家庭内に意見の相違がある場合は父親と「三対一」の割れ方をしていたという。以下鷲巣氏の指摘を引用する。

> 加藤の家庭は両親と加藤、そして妹久子の四人家族だった。ところが「いつも三対一になるんです」（本村久子氏談）。加藤と母と妹の親密な関係がつくられ、そのなかに父親は入ることができなかった。こういう関係は、戦後社会に見られる家庭の在り方をいわば先取りしていたといえる。[6]

一方、子供周一の目線から、母に対する印象は父に対する批判と対照的である。加藤の父信一と母織子は二人とも平等思想をもっていたし、加藤と妹を平等に扱う教育をしていた。しかし、「『羊の歌』では母織子については深い愛情をもって描かれるが、父信一についてはやや冷ややか

に表現され、それが何度も繰りかえされる」[7]。鷲巣氏は以下の通り指摘する。

> 自己嫌悪の一歩手前まで連れていったのは父信一である。その父に加藤の「自己嫌悪」は理解できるはずもない。母織子は、そういう関係から自由であり、加藤に対する深い愛で、加藤が「自己嫌悪の一歩手まえ」（四八頁、改五五頁）にいることを理解した。[8]

鷲巣氏の指摘通り、加藤と母織子の関係は『羊の歌』の「母」に描かれる部分が多いことがわかる。一方、鷲巣力氏は『羊の歌』について虚構があるとも指摘している[9]。『羊の歌』において「母」のほうが父よりも子供周一に愛される理由は単に「母」であり「女性的」だからであろうか。実際、織子は性別による女性への分業を受け入れ、親戚、夫と子供らに期待される女性の役割を担っていただろう。しかしそれだけではなく、織子に重ねて描かれる『羊の歌』の「母」は子供周一の尊敬に値する人間の像そのものではないだろうか。

加藤周一が父に対して疑問と不満を感じる点は三点ほど挙げられる。鷲巣力氏によれば、その一つ目は、加藤は実証主義者、合理主義者の父に理解があるものの、「合理主義だけでは世界を理解できない」[10]と感じていたという。二つ目は社会問題と政治問題について「事件と事件との間の関係が、父の話を通じてあきらかになるということは、ほとんどなかった」[11]という。また、「周囲の社会のあらゆる面に不満を感じていたにも拘らずではなく、まさにその故に、父は「陛下」を崇拝し、対外的な意味での「日本」を強調しなければならなかった」[12]と加藤は述べる。三つ目は「信一が人生を降りたような態度に終始したことである」[13]という。

以上この三点の特徴から浮彫になった父の人間像は「感性の欠如」、「事

物間の関連性の無視」および「主体性の欠如」を象徴するものであると読み取れる。それに対して母のほうは、まずは勤勉な人だった。例えば、『羊の歌』には以下のシーンが描かれている。

> 父方の伯父が仕事もせずに朝から酒を飲んでいることについて、「いやねえ、男のくせに、丈夫なからだで、なんにもしないなんて……」と母織子はいっていた。(14)

次に、合理主義の父に対して母のほうは理屈を持ち出すのではなく、人の感情をよく理解できる人だった。母は世間一般の価値観に同化されずに子供周一の弱さと好奇心にその内側から共感していた。

> 父方の祖父が鶏をさばくのを見せられるが、その嫌悪感と好奇心が渦巻くなかで加藤は泣き出してしまった。「救いに来てくれた母は、「気味がわるかったのね」と優しくいった」。(15)

> 「高等学校の入学試験をまえにして、小説を読むほど馬鹿げた時間の使い方はないではないか」という父信一に対して、母織子は加藤を弁護して、「たとえ社会の役にたたないとしても、詩文の美しさというものがあり、父自身も「万葉集」に凝り、歌をつくったではないか」といった。(16)

人間に殺された鶏の死を目撃して思わず泣いたり、何の役にも立たない小説をひたすら読んだりする子供周一を「母」は優しく見守り、「父」と異なる態度を取っていた。「母」自身は「父」と同じく大人の目線を持ちながらも、大人と異なる目線と感性を持つ子供周一のような人間の素朴な感情と好奇心を共感し理解できる人である。

さらに『羊の歌』には記述されないが、母織子のほうはカトリック信仰があるため、父のような「陛下崇拝」はなく、物事に対してもう一つの全体的な世界観と解釈を持っていたと想像できるかもしれない。「父」の人間像は「感性の欠如」、「事物間の関連性の無視」および「主体性の欠如」の特徴があるのに対して、「母」は「主体性を大切にする」、「感性がある」、「事物間の関連性を重視する」特徴がある人間である。

(2)「母」の像と「女性的」なもの

ここで注目したいのは、これまで見てきたような「母」織子像は単に「母」の像に留まらず、『羊の歌』においては「女性的」なものに暈されて表現されていたということである。加藤周一は以下のように描く。

> 私は世人が「男性的」とよぶだろうもの、腕力にしても、権力にしても、他人を強制することのできる力の強さやいわゆる豪放磊落の気風を、はじめからあきらめ、そこに格別の魅力も感じないで育った。むしろ優しく、微妙なもの、おそらく「女性的」といわれるだろうもののすべてを、愛していたのだろう。(17)

このような「女性的」なものは『羊の歌』の「母」から『続 羊の歌』の「恋人」へと発展していくが、その変化は「母の死」から始まる。また加藤の西洋の旅は小説の中でも現実の中でも「母」織子の死後である。「母が死んだとき」の心情について加藤は『続 羊の歌』で以下のように綴る。

> 母が死んだとき、私は自分の内側が空虚になったように感じた。〔中略〕私の世界からは、無限の愛情の中心が消えてなくなり、世界

はもはや私にとってどうなってもよいものにすぎなくなった。〔中略〕私自身の生涯を、母の死を境として、その前後に別けて考えるようにもなったのである。その前と後とで、私の生きて来た世界のいわば重心が変った――ということに気がついたときに、その考えは私自身をおどろかせた。それまで私が母に頼って生きていたのではなく、むしろ母が私に頼って生きていたのだからである。しかし母を失ってしばらく経って後、私は無条件の信頼と愛情のあり得た世界から、そういうものの二度とあり得ないだろうもう一つの世界へ自分が移ったことをはっきりと感じた。信頼はあらためてつくりだし、愛情はあらためて探しもとめなければならない。京都の女(ひと)は、その事実を少しも変えるものではなかった。[18]

「母」の死によって、加藤の生涯は二つに分けられてしまうほどの変化があったという。「内側が空虚になった」、「無限の愛情の中心が消えてなくなった」と感じたと同時に、加藤は「もう一つの世界へ」移ると感じたという。「もう一つの世界」で「信頼」と「愛情」を探し求めなければならなくなった。「京都の女」と関連させる文脈から読み取れるのは、小説における「母」の象徴するものが「母の死」によって加藤の「恋人」へと引き継がれたという事実である。

前述した「母」という人間像の三つの特徴のほかに、もう一つの特徴を挙げることができる。それは『羊の歌』の「母」も実際の織子も子供に対して「深い愛」（強烈な愛情と情熱）を持っていたことである。実際、織子は子供たちにも自分と同じカトリック信仰を持たせようと強く望んだ。入信しない子供たちを織子は強要しないものの、加藤周一とその妹久子を辛抱強く説得し、亡くなるまで諦めなかったと思われる。さらに、亡くなった後も諦められないという強い意志をもって、自分の死後も説得するようにと親戚の美代にその使命を託したという。

戦後、加藤の母織子が死を覚悟したとき、加藤と妹久子の「信仰のことをよろしく頼む」と美代に言い遺した（本村久子氏談）。織子は加藤と久子を無理やりカトリックに入信させようとはしなかったが、内心では強くふたりの入信を希望していたということだろう。[19]

一方、恋人の「京都の女」は「議論」も「説得」もできない「頑固さ」があった。それは「涼しい眼で笑いながら、これでも頑固で手のつけられない」[20]というような頑固さだった。互いに掴み所がない、情熱もない、魂が決して交わらないという空虚の愛だったかもしれない。「母」の愛情は加藤の世界の内側に直接働きかけ続けていたのに対して、加藤の当時の恋愛対象である「京都の女」は互いの世界に踏み入らない存在であった。『羊の歌』の「母」は加藤のその女との恋愛を好んでいなかったにも拘わらず、加藤は彼女と結婚を考えていたという[21]。しかし母の死後、加藤の理屈と態度は動揺し、変化し始めた。そう変化させたのは男性的な「腕力」でも「権力」でもなく、母の優しい愛情と信頼であった。

母が死んで何年も経った後にも、私はしばしば、自分の死を考えるときに、何の理由もないのに癌で自分は死ぬのだろうと思い、そればかりではなく、もし天国というものがあるとすれば、母はそこにいるにちがいなく、もう一度そこで母に会えるかもしれないと考えることさえあった。[22]

『羊の歌』の「私」は「京都の女」と別れ、母と天国で会いたいと考えるようになったのである。そのうえ、「京都の女」と別れた「私」は留学中に出会った「ロンドンの娘」と結婚することになる。現実の中では、加藤は妻の中西綾子と離婚して外国人の恋人ヒルダ・シュタインメッツと結婚し、さらに晩年にはカトリックに入信するに至った。振り返ってみ

れば、「自分自身の「気持ち」に対しても敏感であり、しばしばみずから信じるところに従って争いを辞さなかった」[23]という情熱を持つ母織子に加藤の人生は動かされたものではなかろうか。

加藤は「京都の女」と別れるシーンを以下のように綴る。

> 「不満な点があるのなら、いってくれ」と彼女はいった。そういうことではない。私はながく彼女を愛していると思っていたが、ひとりの女にほんとうに夢中になったときに、彼女と私との間の関係がそれとはちがうものであったということに気がついたのである。〔中略〕私は放心状態で彼女に別れ、二度と会うまいと考えた。もはや相手のことを考えつづける気力もなかった。それは完全に自己中心的な状態である。しかしそういう状態が成立すると同時に、私はそういう自分自身を第三者のように眺めてもいた。この「自己」とは何だろうか。一人の女から去って、別のもう一人の女へ向う人間の内容は何であろうか。その二人の女との関係を除けば、私のなかには何も残らず、ただ空虚だけが拡っているように思われた。[24]

この文章では「一人の女」から「別のもう一人の女」へ向かうという加藤は「もう一人の女」を登場させていない。「京都の女」は「虚構であり、文化としての日本女性の表象ではないか」[25]という鷲巣力氏の指摘を踏まえて同じように推測すれば、「もう一人の女」は別の恋人でありつつも、やはり何らかの理想の表象だと考えることができるだろう。そして、加藤はその存在に母織子に通じる人間的な性質を期待していたと想像することもできるかもしれない。母織子の「無条件の信頼と愛情」をあらためて探しもとめなければならなかったと感じていた加藤がその時に向かおうとしたのは、母のそれと同じ信頼と愛情を感じさせられる別の恋人であろう。

私はロンドンの娘との関係を断とうと考えて、しばらく手紙を書かなかった。彼女はそのことを怪しみ、仕事を休んで、突然、パリの私の住居に現れた。そのとき私は寝床で本を読んでいたので、寝まきのまま起って扉を細めに開けると、小さな手提かばんをもって、外套の襟をたてた彼女がひっそりと廊下に立っていた。「あなたが手紙に返事を書かないはずはないから、もうパリにいないのかと思った」と彼女はいった。その声を聞き、その柔い髪に触れると、英国での決心は忽ち変った――というよりも、はじめからほんとうに決心していたのではなかった、ということに私は気がついた。もはや他のいかなる考慮も、彼女との時間にくらべれば、とるに足らぬものであった。「あなたはその日本の婦人と暮らすことはできないでしょう」と彼女はいった。たしかにそれは考えることもできなかった。「それならば、私たちが一しょに暮すことをあきらめて、三人の人間が不幸になるより、二人だけでも幸福に暮した方がよいでしょう」。――という計算が、必ずしも私を説得したわけではない。しかし私はすでに彼女と暮すことを決めていた。そして早くも、遠い京都で私を待っているはずの人間を、いつまでも待たせておくのは、公正でないということまで考えはじめていた。手紙で心変りを報らせるというのも、相手を尊敬しないやり方であろう。会って説明した上で別れなければならない。そのためにはどうしても日本へ帰らなければならない……外国人の労働の許可は、私にとって、おそすぎた。私の出発は早い方がよかった。[26]

加藤に会いに行った「ロンドンの娘」は後に加藤の妻となった。小説の中で「京都の女」と対比すれば両者の違いは明らかに描かれている。「ロンドンの娘」は織子と同じように行動力があって愛情の深い人であり、加藤を「説得」する人間だったのである。「京都の女」は加藤の世界を尊

重し、自分から「説得」しないで待つだけなのに対して、「ロンドンの娘」は加藤の愛を信頼し、自分から加藤のところに会いにやってくる。織子を原型に描いた『羊の歌』の「母」の愛情と似ていたのは同じく日本人の「京都の女」ではなく、むしろ「ロンドンの娘」であった。織子を原型に描いた「母」の愛情は小説の中だけではなく、現実の中でも加藤の結婚と人生に大きく影響したと考えられるが、しかし当然ながら現実は小説のそれとまったく重なるものではないだろう。

(3)「女」「庭」「故郷」「西洋」

このように加藤の自伝小説『羊の歌』と『続 羊の歌』は人間の理想を託した象徴的なものを「母」と「恋人」という女性的なものを通して描いた作品だと理解できるのではないだろうか。

女性の象徴について加藤が1995年頃に書いたものがある。以下の通り引用する。

> 日本の近代文学のなかでは、男性作家の女性に対する態度は二つにわけられると思います。女性差別が社会的に制度化されていた社会ですから、それを反映して、女性は対等以下というふうに見る。典型的なのが永井荷風です。荷風は、市民的男女関係さえも認めていないのです。〔中略〕もう一つの立場は、谷崎潤一郎に代表されるような、女性の理想化です。しばしば女神に近い。あるときには身体の魅力が圧倒的で、あるときには精神的なものも含めて、文化の代弁者、代表者、象徴になります。[27]

『羊の歌』より長い年月が経った90年代の見解であるものの、女性を「文化の代弁者、代表者、象徴」として見る態度を、加藤が持ち続けてい

た可能性を裏付けるだろう。

さらに、加藤の場合はこのような「文化の象徴」は「母」と「恋人」という女性の登場人物だけに留まらず、小説の中の「庭」と「故郷」まで複合的に重ね合わせる手法が用いられていると考えられる。加藤は「京都の庭」を11段落に分けて著したが、冒頭から恋人の「女」で始まり、最後は「女」で締め括る文章である。以下は「京都の庭」の文脈に沿って引用する。

> その女(ひと)のために私はしばしば京都へ行った。私は彼女を愛していると思っていた。あるいは、愛していると思うことと、愛していることとは、つまるところ同じことだと思っていた。[28]

「女」について綴る1段落目のあとは2段落目の「寺」と3段落目の「庭」が続いて話題を「故郷」と「西洋見物」へ転じる。

> 私は生れて育った東京を離れることで、ある一つの確かなもの――私の外にあるものと内にあるものとの一つの確かな関係――に出会った。京都とは、故郷を離れることで見出したもう一つの故郷である。[29]

このように西洋の対角にある故郷の存在について綴る加藤にとって生まれ育った東京は元々の「故郷」であるが、京都は「もう一つの故郷」である。元々の「故郷」ともう一つの「故郷」の間を結ぶ「ある一つの確かなもの」がある。それは「私」の「外にあるもの」と「内にあるもの」との「一つの確かな関係」であるという。さらに加藤は京都の庭から「西洋見物」を望み始めたのである。その「庭」は「西洋見物」の前文に置かれていて第3段落目の冒頭は以下のように描かれる。

そうしてある秋の日の午後、ある禅寺の庭で、不思議なことが私におこった。〔中略〕その庭の姿は、刻々と変化してやむことがなかった。東山の黄葉が傾きかけた陽ざしに映えるかと思えば、さっとかげって、枯山水は俄かに灰色の底に沈み、また陽がさすかと思えば、白い砂の上に音もなく銀色の雨が落ちて、石組みの緑の石が甦ったように鮮かに輝きだす。それは一つの庭であり、しかも一つの庭ではなかった。(30)

同じく第3段落目の最後の一句は以下引用の通り段落の冒頭に呼応して「西洋見物」に転じる。

ある秋の日の午後、東山の斜面に映える西陽を見、枯山水の白砂に落ちる雨を見たから、やがて西洋見物の望みを抱くようになったのである。(31)

ここの第3段落で読み取れるのは元々の故郷は唯一の故郷ではない、それと同じように庭も一つの庭ではないのだ。京都のある庭という空間において時間に伴って変化する動的な風景に気づいた加藤は「統一された」「一つの形」の「不思議な確実さ」を覚えたのである。

よろこびと悲しみ、華かさと憂いが、一瞬の表情に現れては消え、しかもそのすべてが控えめな一種の形――その時々の姿を越えた一つの形としかおそらくいいようのないものにおいて、実に微妙に統一されていた。たしかに私はまだ庭を見はじめたばかりで、好奇心にちかいものを感じていたはずだろう。しかしそれにも拘らず、そのとき、ほとんど突然に、これ以上に私にとって身近な世界はありえないだろうということを、不思議な確実さで感じたのである。(32)

ここでいう「確実さ」は前に引用した二つの「故郷」の関係に帰結する文脈になっている。さらにこの文脈の中で「故郷」は「女」へと変わる。

> ひとりの女のあらゆる表情を、私がそこで読んでいたということであろうか。おそらくそうではなくて、女のなかにその世界の反映を見ていたのであろう。(33)

ここで「庭」と「故郷」の次に登場する「ひとりの女」は「世界の反映」であるということから、「ひとりの女」は前者の二つとは並列関係であると読み取れる。「ひとりの女」は「庭」と「故郷」と同等の象徴的な意味を持つと考えられる。つまり、「ひとりの女」も「庭」も「故郷」も、加藤から見て「動的で統一された不思議な世界」そのものを象徴しているのであろう。さらにそれらの間には「確実な関係」があるというのである。

続いて「京都の庭」の第4段落はフランス留学生試験の内容で試験官の「汝は格別の愛着を感ずるや」の質問に対する考えの中で再び「確かな関係」と「女」に触れる。以下引用する。

> あらゆる考えのまえに、動かすべからざる愛着――京都の庭に対した時のように、そのものと私との間に確かな関係がなければならない。その確かな関係を説き明かそうとすれば、古今集以来の歌にもつながり、またひとりの女の言葉の抑揚にもつながり、またあるいは子供の私が渋谷の家の二階の窓から眺めていた道玄坂の上の夕焼けの空にもつながって来て、半生を以てしても尽きない考えがそこから溢れ出して来なければならない。(34)

「京都の庭」の第5段落から最後の第9段落までは「母」の病状と臨終の内容である。第10段落は恋人の「女」とのやりとりと西洋見物に出かける経緯を綴る。最終段落の第11段落は1行半しかなく、加藤にとっての「庭」と「女」が同時に登場し、文章全体を括り付けるような構成になっている。以下の通り、引用する。

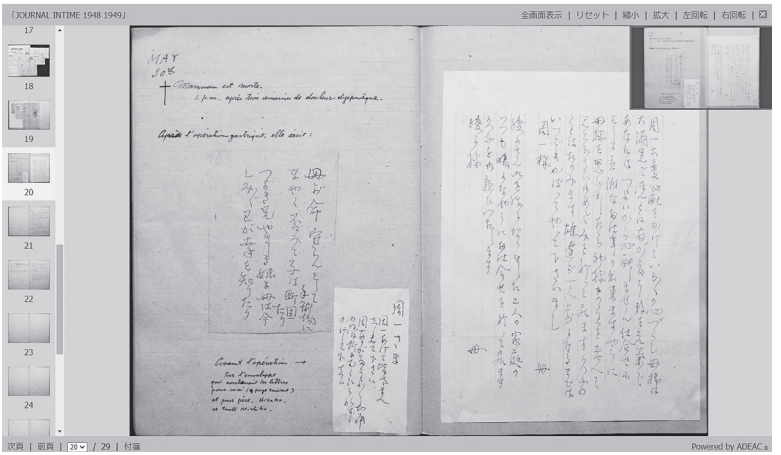
> 私は何年も経ってから京都の庭へ帰ってきた。しかしみずからあれほど愛していると信じていたその女の許へは帰らなかった。[35]

以上のように、「京都の庭」の段落構成および内容における「故郷」、「西洋」、「庭」、「女」（「母」と恋人）は相互の呼応があると認めざるを得ないだろう。「故郷」、「西洋」、「庭」は空間であり、「女」は人間である。このような一連の描写を通して意図するところの根底にあるのは、加藤の世界という空間に対する関心とその変化は西洋という外の空間へ向けたものであると同時に人間の内なるものへの「回帰」ではなかろうか。その内なるものは加藤にとっての「母」であり、「子供」の時に見た東京の自宅風景であり、恋人の「ひとりの女」であると考えられる。そして、『羊の歌』と『続 羊の歌』の小説において京都の伝統文化を象徴する庭をきっかけに、日本人としての「故郷」を探し求めた加藤の矛盾と統一を内包した道のりの根底には、「ひとりの女」に象徴される一個人の立場と世界の相関関係が現れてくる。言い換えれば個人の個別的な世界観と世界の普遍性との間にある双方向の回路およびその両極との相関関係こそ加藤周一哲学の特徴とも呼ぶべきものではないかと筆者は考える[36]。

このように母織子を原型に描かれた小説の「母」は世界を象徴する「庭」において人間の理想を象徴する女性的なもので「ひとりの女」として接続できるものである。『羊の歌』の「母」は織子の実像と重なって見える部分もあるが、虚構の「母」として立ち現れる部分もある。織子の

実像を模った象徴としての「母」は作品の中で象徴的な意味を成している。加藤は人間の理想像を作品の中で「女性的なもの」として描き、織子に重ねた『羊の歌』の「母」として表したのである。加藤は『羊の歌』の中で母織子の人となりを父との対比において浮き彫りにしつつ、彼の理想の人間像を「母」のような女性的なものに託して表現した。そして、そのような人間性を、加藤自身を含む男性によっても受け継がれることができるような一般的なものとして描くことによって、織子の実像を模った象徴としての「母」は、単に一つの女性像であることを超えて、世間の不合理と偏見と閉塞に対抗する存在になる。

最後に留意すべきことは小説の中の恋人の実像も「母」と同様に現実に重ならない点が多い。小説の中の「母」は「京都の女」があまり好きではないが、現実の中の織子は加藤と別れた妻の中西綾子（「京都の女」の原型）をとても気に入って、加藤に強く勧めて2人の「見合い婚」を実現させた人物である[37]。また、加藤周一の日記《Journal Intime 1948 – 1949》[38]によれば、織子は亡くなる直前まで加藤周一と綾子の関係を大変好意的に見守っていたし、2人を祝福していたことが読み取れる。加藤は小説の中では「京都の女」と別れ「ロンドンの娘」と結婚した。現実の中では中西綾子と離婚し、ヒルダ・シュタインメッツ（「ロンドンの娘」の原型）と結婚した。『羊の歌』の「母」は織子と完全に一致しないのと同様に、「京都の女」は綾子ではない、「ロンドンの娘」もヒルダではないだろう。どちらの「女」も加藤が『羊の歌』や『続 羊の歌』の小説において虚構した理想像であろう。しかし、それでもなお虚構の中でしか語れない加藤の理想と人間の真実があるだろう。



画像１　加藤周一の日記《Journal Intime 1948–1949》の 20 頁目、加藤周一の母織子の「遺言」を貼り付けて保存した頁（「立命館大学図書館／加藤周一文庫デジタルアーカイブ」より）。

註

(1)　鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波書店、2018、10 頁。

(2)　前掲書、55 頁。

(3)　前掲書、31 頁。

(4)　前掲書、5 頁。

(5)　前掲書、34 頁。

(6)　前掲書、34 頁。

(7)　前掲書、51 頁。

(8)　前掲書、50 頁。

(9)　前掲書、vi – vii頁。

「『羊の歌』に書かれる内容は、その大半は事実を踏まえ、そこに虚構が施された。とりわけ私事にわたることに虚構が多い。〔中略〕それゆえ、虚

構として書かれた事柄については、それがなぜ虚構として書かれたかを考え、重要でありながら書かれなかったことについては、なぜ書かれなかったかについて推しはかることも、加藤を理解するうえで重要な契機となるだろう」。

(10) 前掲書、52 頁。

(11) 前掲書、52 頁。

(12) 前掲書、53 頁。

(13) 前掲書、54 頁。

(14) 前掲書、56 頁。

(15) 前掲書、56 頁。

(16) 前掲書、58 頁。

(17) 加藤周一「病身」『羊の歌――わが回想』岩波書店、1968、43 頁。

(18) 加藤周一「京都の庭」『続 羊の歌――わが回想』岩波書店、1968、40–41 頁。傍線は筆者による。

(19) 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波書店、2018、25 頁。

(20) 加藤周一「京都の庭」『続 羊の歌――わが回想』岩波書店、1968、35 頁。

(21) 前掲書、43 頁。

(22) 前掲書、42–43 頁。

(23) 加藤周一「高原牧歌」『羊の歌――わが回想』岩波書店、1968、139 頁。

(24) 加藤周一「外からみた日本」『続 羊の歌――わが回想』岩波書店、1968、168 頁。傍線は筆者による。

(25) 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波書店、2018、339 頁。

(26) 加藤周一「別れ」『続 羊の歌――わが回想』岩波書店、1968、161–162 頁。

(27) 加藤周一「女性観」『NHK 人間大学　鷗外・茂吉・杢太郎』1995 年 1 月～3 月期、日本放送出版協会、1995、113 頁。傍線は筆者による。

(28) 加藤周一「京都の庭」『続 羊の歌――わが回想』岩波書店、1968、34 頁。

(29) 前掲書、36–37 頁。

(30) 前掲書、36 頁。

(31)　前掲書、37 頁。
(32)　前掲書、36 頁。
(33)　前掲書、37 頁。
(34)　前掲書、37–38 頁。
(35)　前掲書、44–45 頁。
(36)　劉争『「例外」の思想――戦後知識人・加藤周一の射程』現代図書、2021、130–132 頁。
(37)　鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波書店、2018、487 頁。
(38)　《Journal Intime 1948–1949》は 1948 年から 1949 年にかけての公私にわたる出来事が綴られた日記である。加藤周一デジタルアーカイブ「JOURNAL INTIME 1948 1949」(https://adeac.jp/ritsumeikan-univ-lib-KatoShuichi/top/topg/itiran02_1.html) のサイトは以下の内容を説明する。
「加藤周一が、戦後初期、作家として旺盛な執筆活動を展開しはじめる時期からフランスに留学する直前までの時期に当たる。加藤の人生の重要な転機となった時期であり、そのきっかけとなった母ヲリ子の逝去に至る日々が描かれ、ヲリ子の「遺言」も付される」。

（りゅう じゅん　関西国際大学講師）